



特集

3年に一度の神事・受け継がれる意志

萩日吉神社

流鏑馬

1月15日(日)、埼玉県指定無形民俗文化財「萩日吉神社のやぶさめ」が行われました。現在、この流鏑馬は3年に一度行われ、明覚郷・大河郷の方をはじめとして、多くの方の熱意により、受け継がれています。私も広報担当になり、2回目の取材となります。今月号では、流鏑馬を支える人々の姿とその思いをお伝えします。

「木曾義仲」と「流鏑馬」について

この流鏑馬は、木曾義仲の遺臣七氏が、主君の義仲を祀った萩日吉神社に流鏑馬を奉納したことが始まりとされ、天福元年(1233)に最初の奉納が行われたといわれています。

木曾義仲(源義仲)は、平安時代末期の武将で、埼玉県嵐山町の出身といわれています。嵐山町にある「鎌形八幡神社」には、義仲が生まれたときに産湯として使用されたと伝えられる「木曾義仲産湯の清水」と伝えられる場所があります。幼少の頃、権力争いから逃れたため、信濃国木曾(現在の長野県)で育ち、その地名から「木曾義仲」と称したとされています。

す。平家の軍勢を破り京へ入京した後、征東大將軍の地位に任じられる程の出世をしましたが、後白河法皇と対立し、追われる身となり、源頼朝によって、最期は近江国粟津(現在の滋賀県大津市)で討たれたといわれています。

この義仲の遺臣七氏は、平村の坂本家の先祖にあたる人を頼り落ちのびてきたとされ、坂本家の忠告により、明覚郷と大河郷に分かれて住むようになったとされます。それが、明覚郷の馬場、市川、荻窪の三氏と大河郷の横川、小林、加藤、伊藤の四氏となります。

流鏑馬を支える人々

流鏑馬では、両郷から当番を選び、1頭ずつ馬を出し奉納します。今回の流鏑馬では、明覚郷の当番家は馬場富士雄さん、大河郷は加藤正見さんになります。

一方、両郷を迎える萩日吉神社の氏子である西平の皆さんは、馬場作りを行います。これは「クネユイ」と呼ばれています。

また、萩日吉神社流鏑馬保存会や流鏑馬賛助会も組織され、流鏑馬を支えています。

伝承者の声

流鏝馬で中心的な役割を果たす当番家。両郷の当番となった馬場富士雄さんと加藤正見さんに伝統文化を継承する思いや、当番家を務める心境などを伺いました。

明覚郷当番家 馬場富士雄さん

由緒ある流鏝馬に
たずさわれることを
誇りに思います



歴史あるこの流鏝馬を継承していかなければならないという強い思いがあります。当番家の役割を果たすことができるのは、明覚郷では馬場・市川・荻窪の三家だけです。名誉なことだと思っています。

私は、18歳から流鏝馬に関わり、51年になります。当初は、一番若手でしたが、気が付けば年長者になってしまいました。継承していく上で難しいところは、3年に一度のことなので、道具の作り方などを次の世代に伝えていく点です。今、「馬止め」などの道具も若い世代の方に作ってもらったり、馬方も経験豊富な方に、若い世代を指導してもらっています。

また、住宅事情なども変わり、昔と同じ形で行うことは難しくなってきました。行う方法なども工夫しながら、この流鏝馬を伝えていきたいです。

流鏝馬賛助会、町、神社、そして、地域の方の協力なくしては流鏝馬の奉納はできません。皆さんの協力に深く感謝しています。

大河郷当番家 加藤正見さん

「流鏝馬」を子どもたちに
伝えていきたい



大河郷では、当番家を受ける順番が決まっています。なので、心構えは以前からできていました。流鏝馬の準備について、資料で残っている物は少なく、先輩方から伝え聞いて、それを次の世代に伝えていきます。教える際に理由が解らないことが多く、伝えていくのが難しいです。

流鏝馬は、約800年の歴史があります。大河郷と明覚郷という、異なる地域が一緒になって流鏝馬を行うのは珍しい形です。私自身もそうですが、若い世代の方も、子どもたちに流鏝馬のことを伝えてもらいたいです。

流鏝馬の思い出で、私も子どもの頃に「矢取りっ子」をやったことがあります。今は行っていないんですが、「矢取りっ子」は流鏝馬の前日に当番家に泊まる風習がありました。両親から離れて、寂しい思いをしたのを覚えています。

流鏝馬賛助会をはじめとして、多くの方のご協力なくしては、流鏝馬を行うことはできません。とても感謝しています。しっかりと奉納できるようがんばっていきます。



流鏑馬へ向けて

流鏑馬へ向けては、各地区で様々な準備を行っています。ここでは、明覚郷と神社、西平地区の皆さんの作業の一部をお伝えします。

明覚郷

明覚郷では、流鏑馬の準備は、1か月半前の12月から始まります。その準備は、「篠切り」から始まり、「篠磨き」、「矢作り」、「道具出し」などです。今回、準備された篠は850本。「篠磨き」の作業できれいに皮をむき、明覚郷の矢の長さの2尺八寸(約85cm)に揃えられた篠は、1月7日(土)に行われた「矢作り」の作業で、矢羽などを貼ります。その際、的板などの他の祭具の準備も行われます。神社と西平地区

1月8日(日)、会場となる

萩日吉神社前では、「クネユイ」と呼ばれる馬場作りが行われました。神社に置かれていた材料を運び出した後、最初の柱に「イボユイ」という結び初めを行い

ます。この儀式は、七氏を大河郷・明覚郷に分かれて住むように手配した坂本家が代々行っています。

ヨイマチ

本番前日の1月14日(土)、「矢取っ子」や「乗子」の着付けなどが行われ、13時頃には神官により矢や的板などが供えられた神前で祝詞が奏上されます。その後、萩日吉神社の氏子の代表者や来賓などを含めた関係者一同で、流鏑馬の無事と成功を祈願し祝杯を上げる「ヨイマチ」が行われます。式中には「三献の儀」も執り行われ、関係者の絆を深めます。



流鏑馬当日

1月15日(日)は、時折風花が舞う厳しい寒さとなりました。明覚郷の皆さんは出発に備え、神馬へ馬具の取り付けなどを行います。

出発の際には、「矢取っ子」の持つ矢立ての紙に弓につがえた矢の先をあてて一礼する「ヒキメ」という儀式を3回行い、その後、萩日吉神社、東西南北、天へ6本の矢を射る「四方固め」を行います。萩日吉神社までの道中、八幡神社(桃木地内)で安全祈願を行い、女人堂(西平地内)で慈光寺に遥拝します。9時過ぎには両郷とも萩日吉神社に到着。ただちに幕場を構築します。この時、西平上宿の山口家が、明覚郷の幕場に御神酒と重箱を持って訪問します。重箱の中には、塩アンのおはぎなどが入っており、このおはぎは、神馬にささげられるもののこのことです。

「矢取りっ子」

：「夕まどう」の際に馬が走る前後に先行する男の子のこと。



明覚郷
馬場太一さん(8歳)



大河郷
中島蕾己さん(8歳)

お父さんとサッカーをしてるので、走るのには得意です。学校の友達からも「がんばって」と応援されました。おまつりでは、おじいちゃんからいわれたように、一生懸命走りました。でも、なんども往復したので大変でした。

最初は、馬が怖かったけど、楽しかったです。キックボクシングをやっていて、毎日5kmを走っているの、走ることは自信があります。馬場を走る時は、大勢の人がいて緊張したけど、いつもどおり走ることができました。





写真説明

①「三献の義」の様子、②厳しい寒さの中で行われる「クネユイ」、③「イボユイ」を行う坂本氏、④明覚郷の幕場を訪れる山口家、⑤明覚郷の「矢作り」の様子、⑥萩日吉神社へ向かう様子、⑦「四方固め」の矢を取った子どもたち、⑧「朝まとう」の様子、⑨「夕まとう」の様子、⑩「ヒキメ」、⑪「四方固め」、⑫馬場を一生懸命走る矢取りっ子

朝まとう

両郷の準備が整うと「朝まとう」が行われます。今回は、一の馬を大河郷、二の馬が明覚郷となります。

朝まとうは、1回目を「バミセ」といい、馬に馬場を見せます。2回目は、手綱を放ち、乗子は身体を前後に反らしながら走ります。3回目は、「ノッパライ（乗払いの意）」といい馬場を走り、そのまま幕場に戻ります。

夕まとう

明覚郷が「宿まわり」という決まった4軒を訪れ、昔流鎗馬を奉納する際にお世話になったお礼を行うと、いよいよ「夕まとう」の時を迎えます。両郷の挨拶が交わされると幕場を払い会場へ向かいます。この時、特設馬場は多くの観客で埋めつくされます。

神官が馬場を清めると「ヒキメ」、「四方固め」が行われ、会場内の緊張感も高まります。「夕まとう」は、5回馬場を走りますが、その内、矢を射るのは3回です。明覚郷は3本の矢を持

ち、一の的、二の的、三の的を狙います。一方、大河郷は、一本の矢を持ち、順番に各的を狙って矢を射ます。この時「矢取っ子」は、介添え役のお父さんと共に馬が走る前に一生懸命に馬場を行ったり来たりします。矢が的にあたると「カツ」と乾いた音が響き渡り、大きな歓声が上がっていました。最後の「ノッパライ」を終え、両郷は帰路につきます。

取材を終えて

流鎗馬は、両郷や神社の関係者だけでなく、小川警察署、消防団、交通安全協会、交通指導員の皆さんなど多くの方の協力により守られています。伝統文化には、「地域のつながり」を深める役割があると思います。しかし、全国的に伝統文化の担い手不足が課題となっています。簡単なことではありませんが、しっかりと後世に残していっていただきたいと感じました。

特集

萩日吉神社 流鎗馬